

秋の彼岸によせて

平成二十九年九月 大乘寺 長老 岡 光俊

今年も日に日に日暮れが早くなって参りました。

実りの秋と共に、ご先祖さまが私たちが佛さまの教えを聴かせて頂き、迷い多い此の岸より、心穏やかに、また清々しい日々が頂けるよう、彼の岸を指す彼岸が参りました。

この拙文もここ数回は、普段皆さまが墓参りのときに何気なく用いておられる櫛、柎、塔婆、ロウソクのお話しをさせて頂きましたが、今回は、線香についてお伝えさせて頂きたく思います。

経文に「八千億の佛に供養し奉事して衆華、瓔珞、塗香、抹香、焼香を供養せん」と説かれているように花や美しい飾り物と共に香りも供物とされていたことが解ります。

またお経を毎日読むことにより身体が清まり、口からは青蓮華の清らかな香りがいずると次のように説かれています。

「教えを受けて往いて世世に口の患なく 口の気臭穢なくして優鉢華の香 常に其の口より出でん」

また経文にはそれ以上に、地中に埋もれている金銀まで香りで解ると説かれています。これは弘法大師さまが四国を回られたときに多くの奇跡を現されたと伝えられておりますが、ご大師さまが佛さまであつたこと、また伝説が実話であつたことも窺えます。

「地中の衆の伏蔵 金 銀 諸の珍宝銅器の盛れる所 香を聞いで 悉く能く知らん」と。

また経文にはよき香りとして、須曼那華香、闍題華香、末利華香、膽蔔華香、波羅羅華香、赤蓮華香、青蓮華香、白蓮華香、華樹香、果樹香、栴檀香、沈水香、多摩羅跋香、多伽羅香、および千萬種の和香、もしくは抹せる、もしくは丸せる、もしくは塗香」と現存する香りのすべてが説かれています。

また香りは「妙法堂の上にあつて、刀利の諸天の為に説法する時の香」と説かれてるように、修行にそつて香りも変わり、「梵天に至り上頂に至る諸天の身の香、また皆これをかぎ、ならびに諸天の焼く所の香をかかん。および菩薩の香、諸佛の身の香」と説かれてるように、香りそのものが佛さまそのものを現しているのです。

これらの香りを線状に加工した物が線香で発祥は古代インドといわれています。

秋の彼岸、虫の音に耳を傾け、朗月を眺め、香をたき、経文を手にご先祖さまと共に浄まり、佛さまの香りを体験されますよう。

きつとなにかが変わって参ります。